日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)関東

# 文は信なり

No.33　クリスマス　定価 100 円

発行責任者
本部代表・三浦喜代子
JCP 事務局
〒131-0043
墨田区立花 4-6-13
TEL&FAX 03-3616-8621
郵便振替 00170-0-61838
HP:http://jcp.daa.jp

## 先人たちの降誕メッセージ

三浦喜代子

神のひとり子であるイエス・キリストの降誕の出来事は聖書にしか記されていません。分量もわずかです。それにもかかわらず、二千年の歴史の風雪に耐え、今もますますあらゆる方法で伝えられています。絵画や音楽やメディアなどあらゆるジャンルに及んでいます。

それはさておき、偉大な信仰者や賢者たちが語った膨大なメッセージの中からほんのひとひらを拾ってみました。

★小さな人々の家の上で／星が止まった時／星は間違っていなかった／大きな未来がそこに生まれた。
クラウス・ヘンマーレ

★神が人となったということを／一度でも理解した人は／非人間的に語ったり／行動したりすることはできない。
カール・バルト

★黄金も、友人も、権力も、名誉も／キリストが人となったという福音ほどには／私を喜ばせることはない／人間の心はそれを考え出すことはできず、それについて十分に語ることもできない／神は人間を／心から愛されたに違いない／神はそれほど私たちの近くにおられ／私と同じ人間となられたのだ／神は私と同じ者になったのだ。
マルティン・ルター

★ベツレヘムの星は／今日もなお／暗い夜に輝く星である。
エディット・シュタイン

★飼い葉桶の幼子を見て／だれが神の子と思ったであろうか／神は幼子の中に隠れておられる／神は「お忍び」で来られた／この矛盾はクリスマスの秘儀の本質／神の威厳は卑しさのうちに／神の力は弱さのうちに／神の永遠は死すべきからだのうちに現れる／神は静かに来られる／神はその力を言いふらし、見せびらかせることはない／家畜小屋と飼い葉桶の出来事のうちに／ゴルゴタの十字架はすでに、ひそみ予告されている。
カール・レーマン

★神が人となったということ／それは神の愛の大いなる知らせ／このことによって、人間は面と向かって神を見ることができる。
ビンゲン

★わたしたちのだれが／クリスマスを正しく祝いうるか／すべての見栄と名誉欲／すべての高ぶり／すべての独断を／すべて飼い葉桶の前に置くことのできる人／自分を小さな者とし／神のみを大いなる者と仰ぐことのできるひと。
ディーとリヒ・ボンヘッファー

★神はあなたを問いただすことはない／あなたを非難することはない／神はあなたを知っており／あなたにほほえみかけ／あなたを愛している／それはクリスマスの神秘である。
ヴォルフガング・ペップラオ

先人たちの至言を噛みしめながら、今年も『恵みとまことに満ちた』降誕節をお迎えください。

『クリスマスに贈る１００の言葉』より

【目　次】P1~2 三浦喜代子　P3 森田勝之　P4 志田雅美　遠藤幸治　P5 長谷川和子　駒田隆　P6 槙尚子　P7 ~8 山本披露武　P8 西山純子　P9 島本耀子　P9 ~11 土筆文香　P10~11 臼井淳一　P11 篠田一志　P12 佐藤晶子　編集後記・ほか

## ドイツ告白教会に属し、ナチと戦った一人の牧師の戦時下の説教から抜粋要約

### ★救いは上から始まる★

ハンス・ヨアヒム・イーバント

御使いは彼らに言った『恐れることはありません。私はすばらしい喜びを知らせに来たのです。今日、ダビデの町であなた方のために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは布にくるまって飼い葉桶に寝ておられるみどり子を見つけます。これがあなたがたのためのしるしです』。　＊ルカ二章一〇～一二節＊

降誕の物語は上から始まります。救いの物語は上から始まります。私どもはいつも下から始めざるを得ないのです。立っているところ、苦しんでいるところ、絶望しているところから始めざるを得ないのです。しかし、救済の物語は天の一角が開かれて、明瞭な言葉で語りかけるところから始まったのです。

『恐れるな』、『すばらしい喜びを』と声は言います。しかし天使に、地上に何が起こっているか知っていますかと言いたいのです。私どもは大きな喜びなど何一つ知りません。知っているのは苦しみがどんどん増し、苦悩が深まっていることです。陰のごとく迫る死であり恐怖です。自分はしあわせから追放された者、悲惨な者でしかないと知るのです。闇が、人間の苦悩が、人間喪失が起っています。これがすばらしい喜びといえましょうか。

天使に、一度我々とともに全世界をへめぐって見ませんかと頼みたいのです。崩れかけた家に老夫婦がいます。戦争が子どもたちを奪いました。二人とも悲しみに沈んでいます。天使よ、ここに喜びがありますか。

天使とともにさらに遠くへ行きます。戦争が行われているところへ。一人の人間が他の人に武器を向けています。前方の塹壕に何人かの兵士が潜んでいます。ここに喜びがありますか。

最後に、天使に見てもらうために一つの扉を開きます。私たちの心の扉です。思い煩いが巣くっています。暗い暗い将来への思い煩いです。罪悪が巣くっています。大切な物を壊し、多くのことを怠けてきた嘆きが巣くっています。ここに喜びのメッセージを携えて来たいと思われますか。

しかし天使は黙っていません。天使は神からの知らせを変更することはありません。『あなた方のために』、『今日、救い主がお生まれになった』と天使は言います。いったい、神のキリストとはどなたですかと尋ねます。天使は飼い葉桶に眠る幼な子を示します。すべての人間の子と変わらない幼な子です。それではなぜ幼な子が私たちの救い手になれるのでしょうか。

天使は言います『これがあなたがたへのしるしである！』この幼な子は、神があなた方の所におられるしるしなのです。この王であるみ子はこの世の牢獄に入って来られました。困窮と暴力支配の束縛を受け入れられました。だがなおそこで王であり続けます。

もう一度皆さんの心の扉を開いてみませんか。そこに、この幼な子は留まろうとしていてくださいます。

私どもは天使といっしょに行かなければなりません。私どもを束縛するものから離れて、出ていくのです。自分自身からも出ていくのです。この幼な子のところへ行かなければなりません。『ベツレヘムへ行こう』と立って行くのです。幼な子のおられるところ、そこでこそ天は開かれます。そこでこそ、喜びは大きくなります。そこでこそ、牢獄は開かれ、死人は生きます。疲れた者たちが新しい力を得ます。不治の病も清くなります。そこでこそ喜びの知らせを聞くのです。

この幼な子はすでに私どものそばにいてくださいます。大切なのは、私どもがなお間に合ううちに、このみ子のところに来ることができるということです。　（三浦喜代子）

## サンタさんへの三通の手紙

森田勝之

ある児童養護施設にいる子供たちの手紙です。この施設は、家の事情で親と一緒に住めない子供や、親が亡くなってしまって親戚から預けられた子供たちが１５０名ほど暮らしています。中には実の親から虐待を受けた子供たちも保護されています。

クリスマスが近づいてくる頃、街は色とりどりの飾りであふれます。プレゼントやケーキを買って帰る親たちでデパートは混んでいます。家族の笑い声がいたるところで弾んでいます。しかし、施設の子供たちはそのような暖かい家庭を知りません。

家族の集うクリスマスに迎えにくる親もなく過ごしている子供たちがいることをおぼえてください。

（一通目の手紙：りょうくんは失踪した母親の両親に育てられていましたが、祖父母が老齢のため施設に入ってきました。ところが一ヶ月前、足に骨肉腫が発見されたため手術を受けることになりました）

**サンタさんへ　　りょう**（小学校二年）

ぼくはびょうきで入いんしています。あした、足のしゅじゅつをするのですこしこわいです。

サンタさんは子どもが　だいすきだって聞きました。だからぼくのこともすきですよね。

ぼくは　あるけないけれど、いろいろお手つだいをしています。そうじもしています。お花の水やりもしています。

こんどぼくのところへきたら声をかけておこしてください。

（二通目の手紙：りえちゃんは父子家庭でしたが、父親の事業の失敗と自己破産のため育てられなくなり施設にはいっています。施設で三回目のクリスマスを迎えます）

**サンタさんへ　　りえ**（小学校４年生）

去年はありがとうございました

サンタさんにいただいた本がとてもおもしろくて、あれから図書館でどんどんかりるようになりました。

本を読むと新しいことや知らないことをおぼえるようになります。

今は生活がたいへんなので本が買えないけれど、パパの仕事が成功すればたくさん本をかってくれるそうです。

でも、図書館があるので本は読めます。

本がたくさんなくてもいいからパパが明るいほうがいいです。

おねがい。

パパをげんきにしてあげてください。

（としやくんには両親がいません。母親とふたり暮らしだったのですが、その母親が病気で亡くなってしまったのです。施設で二度目のクリスマスを迎えます）

**サンタさんへ　　としや**（小学校三年）

ことしもルカハウスのみんなは元気です。クリスマスの前には、ひろきくん、れいちゃん、たかひろくんのお父さんやお母さんがむかえに来るそうです

しゅんくん、あすみちゃん、じゅんくん、ひとみちゃん、りえちゃんは、ぼくといっしょに　おるすばんです。

クリスマスには　おかしがいっぱいです。ケーキも大きいです。

ハウスの先生とうたったり、あそびをします。

**クリスマスのあさに目がさめたら、**

**ママがいるとうれしいです。**

## あの日のクリスマスプレゼント

志田雅美

八年前のクリスマス・イブのことです。その日、わたしは息子と一緒に洗礼を受けて、初めてクリスマス・イブ礼拝に出席しました。

キャンドルを灯した礼拝堂はとても幻想的で、聖書のみことばも讃美歌も、からからに渇いた地に水がしみ込むように、心の隅々にまで沁みわたるようでした。

わたしはとても満たされた気持ちで教会を後にし、息子と二人でレストランに向かいました。

時刻はすでに午後八時を過ぎていましたが、待つ人のいない家に急いで帰る必要もなかったので、礼拝の余韻を楽しみながら食事をしていこうと思ったのです。

レストランはしあわせそうな家族やカップルで溢れていました。どの人もみな笑顔でした。食後のコーヒーを飲みながらプレゼント交換をする人もいました。

その人たちを見ていたら、ふいにとても寂しくなりました。わたしはよほど暗い表情をしていたのでしょうか、息子が心配そうに私の顔を見つめていました。

その時でした。なにかあたたかいものがわたしを覆ったような気がしたのです。体ごとすっぽり包まれているような感覚……といったらいいでしょうか。わたしはいいようのない安らぎを覚えて「イエスさま、このままずっとわたしを包んでいてください」と祈りました。

すると、心にみことばが浮んだのです。

『わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる。マタイ二八章二〇節』

まるでイエスさまがすぐそばにいらっしゃり、囁かれているような気がしました。

その時からわたしは毎日祈るようになりました。祈りのたびに、心があたたかいもので満たされるようにもなりました。

八年経った今もそれが続いています。もう、しあわせそうな家族を見ても、プレゼント交換をするカップルを見ても、少しも寂しいとは思いません。イエスさまがいつもそばにいてくださると知ったからです。

それだけではありません。二千年前のイエスさまの十字架の死が、わたしを贖うためのものだったと心から受け止めた時、イエスさまご自身こそ、わたしへの贈り物だったことも知り深く慰められました。

あの日のクリスマス・イブから、ずっと心の奥深くにイエスさまの御声『わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる』が響いています。

## ばあちゃんパワー

遠藤幸治

私にはたいした興味もなく、行ったことも観たこともないディズニーランドに、八十路を過ぎた妻を連れて、家族八人が行くことになった。むろん妻も一度も行ったことがない。「せっかくの好意だし、話のタネにもなるから、行った方がいいよ」と勧めた。

妻は、早朝に車で迎えに来た娘家族と出かけて行った。

帰りは夜中になるとも、ゆっくり楽しんでくるといいよと祈って送り出した。

だが、なかなか帰ってこない。待つ身としてはだんだん心配になってきた。無事を祈りながら、読書しながら、深夜十二時過ぎまで待ち続けた。

ようやく帰宅した妻に「楽しかったかい」と様子を訊くと、一番のトピックは「ショーを観るための抽選に、私が当たったのよ。めったに当たらないんだって」と声を弾ませて話してくれた。

はじめて行って抽選に当たって、八人全員が指定席に座れた。「これぞ、ばあちゃんパワーだ」とみんなで爆笑したそうだ。

クリスマスを前に、はやくも神様がプレゼントしてくださったに違いない。疲れを見せない妻の明るさにこちらも力が湧いた。

## 四十年前の子どもたちとのクリスマス

長谷川　和子

生後六ケ月の娘を背負い、四歳の息子の手を引き、六歳・八歳・十歳の姪らを連れて私は奥羽本線庭坂駅から列車に乗り込んだ。

教会がある二つ先の福島駅へ向かうためであった。姪たちは米沢市内に住んでいたので約一時間かけてやって来たのである。駅から徒歩三分の我家のアパートの六畳は急に賑やかになった。本当のクリスマスを知って欲しいと、夫の兄弟にゆるしを得て、子どもたちだけでやって来たのだ。

車中、こちらを見る幾人かの視線に気づいた。「お母さんは大変だね」、「今どき五人の子をもつなんて立派なもんだよ」などと……

私は「ええ」と言って会釈をした（皆さん私の子どもだと思っている……）おかしさがこみ上げ、五人の子持ちでもいいかな……と思ったりした。

結婚を機に姪たちにイエスさまを知ってほしいという思いから、毎年クリスマスの時期になるとイエスさまに関する絵本や聖書物語本を贈っていた。今回やっと教会学校で過ごしてほしいという願いがかなって私は心が弾んでいた。福島駅から歩くこと十分、ＣＳ教師が優しく子どもたちを迎えてくださった。

姪たちは何度も私の方を振り返りながら教師の後について行った。私の背には娘だけが残った。娘をあやしながら大人のイヴ礼拝に出てイエスさまの誕生を喜び、子どもたちと共に教会に来られたことを感謝した。

帰りの車中で子どもたちは、プレゼントされた菓子袋を開けたり閉めたりしながら口に運んでいた。

「イエスさまって馬小屋で生まれたんだね」「博士が光る星の方に行ったらイエスさまに会ったんだって」等々と初めて知る不思議な出来事に目を輝かして話してくれた。

その夜は寝床の上でプレゼントの絵本やカードを見せ合いながら、なかなか寝つかれないようであった。

喜びあっていたあの日の様子が浮かぶ。今から四十年前、私が二十代後半の出来事である。今や姪たちは四、五十代となった。あの日のことを覚えているだろうか。

あの時、背負っていた娘は三児の母となり、毎日曜日子どもたちと教会学校へ通い、時に奏楽の奉仕もしている。年月の流れの早さに驚きつつ、クリスマスを迎える頃になると、幼かった姪たちとの光景を思い出している。

## まばたきのクリスマス

駒田　隆

水野源三さんのクリスマスの歌は、次のように始まります。

「一度も高らかに／クリスマスを喜ぶ賛美歌を歌ったことがない／一度も声を出して／クリスマスを祝うあいさつをしたことがない／一度もカードに／メリークリスマス　と書いたことがない」

脳性小児麻痺の患者である彼には、発声機能も、自分の手で書く機能もありません。彼に残されていたのは、まばたきによる文字盤の字の追跡だけでした。

彼は、まばたきます。

「だけどだけど／雪と風がたたく部屋で／心の中で歌い／自分自身にあいさつをし／まぶたのうらに書き／救いの御子の降誕を／御神に感謝し喜び祝う」

彼にとってイエスの誕生は、同時に、新たな水野源三の誕生でもあったのです。イエスによって、この世に生きる幸いが与えられたのです。神からの賜物である、まばたくことによって、彼は、クリスマスを賛美しました。

「御神に感謝し喜び祝う」、と。

わたしたちも、与えられた賜物で感謝を！

（「救いの御子の降誕を」・水野源三詩集『わが恵み汝に足れり』より）

## クリスマスには子どもの本を

槇　尚子

子供達と一緒にクリスマスを迎えていた頃、たくさんの「クリスマス本」を紹介しました。授業で音読劇にしたり、絵本を楽しんだりしました。

秋の日が部屋いっぱいに差し込んでくるアドベントの頃から一カ月、教会もどの家庭もそして街までもクリスマス一色です。

クリスマスにはどんな本を読みましょうか。それぞれ思い出の本があります。

**『クリスマス・キャロル』**

日本でもチャールス・ディケンズのこの物語を知らない人はいません。当時のイギリスの社会を反映して貧しい人と富める人を対比し、真の豊かさとは何かを追求しています。人間を変えることが社会を変えることにつながると考えるのは、作者の生い立ちも関係しているかもしれません。

過去、現在、未来、私たちはどうなっていくのでしょう。クリスマス前の華やかさ、質素でも心がこもった食卓、クリスマスおめでとうと言い合う喜び。スクルージは一晩で心を入れ替えましたが、私たちの現実社会では色々な物語があります。私は新潮文庫の村岡花子訳で読みましたが、いろいろ出ています。

**『クリスマス物語集』中村妙子訳　偕成社**

愛と優しさと楽しい笑い声の満ち溢れる日がクリスマス、その喜びを夜空の星やろうそくや鐘の音に託して語り継がれてきた物語集です。この本から多くの絵本が生まれました。特に『サンタクロースっているんでしょうか？』は、今やクリスマス古典とされています。アメリカのわずか八歳の少女の疑問に誠実に答えたニューヨーク・サン新聞の記者は、後の時代まで伝えられるとは想像もしなかったでしょう。私は大人になってから読みましたが、全ての世代の人に訴えるものを持っている本ではないでしょうか。

『クリスマスイブのできごと』は詩ですが、有名な画家がそれぞれ絵を描いています。特にターシャ・チューダは二回もこの詩に絵を添えました。絵本、カードなどになり、親しまれています。わが家では白いペーパークラフトのこの本をこの時期いつも飾っています。

**『キリスト伝説集』**

**ラーゲルレーヴ作イシガオサム訳岩波文庫**

教会学校教師必読の書として若い方に勧めてきた本です。作者はスエーデンの人で、女性として初めてノーベル文学賞を受賞した方です。三代前は牧師の家系だったとか。

本書は二十世紀初めに出版されましたが、日本へは早くも翌年に小山内薫によって紹介されました。クリスチャンはじめ何人かが訳を試み、多くの絵本になって広まっていきました。

中でも『ベツレヘムの子ら』はイエスさま誕生前後の物語で、クリスマスの意味を文学者としての言葉で伝えています。ヘロデ王の命令に従うことこそ生きがいだと信ずる兵士が幼いイエス様に出会って変えられていきます。教会学校のクリスマス会で、学校で、よく語った懐かしい物語です。

これが児童書なのか大人の書か、区別するのは難しいことです。

『靴屋のマルチン』『ちいさい曲芸師バ―ナビ―』など民話のかたちをとっている童話もあります。戦場で敵対する二つの国がこの日ばかりは共に讃美歌を歌ったという史実に基づいた『戦争ゲーム』もいい本です。

今年は日本では厳しい災害や暗い社会での事件が多くありました。東日本の傷も現地ではまだいえていません。今年こそクリスマスが待たれます。ヨセフとマリアが故郷へ帰ったように、私たちもそれぞれの故郷へ帰りたいと思います。私たちの故郷である教会は門を開けて待っています。クリスマスはみんなの気持ちが優しくなる日です。

## 童話・べそかき天狗とサンタさん

山本披露武

「ぼくのお父さんを知りませんか」

ジングルベルの歌が流れる街の中を、気の弱い、べそかき天狗が、お父さんの鼻高天狗をさがして歩いていました。

けれども、だれも教えてくれません。べそかき天狗が近づいていこうとすると、

「あっ、天狗だ！こわいよう」

といって逃げてしまいます。大事そうに紙袋を持って薬屋さんから出てきた少年などは、

「なに、鼻高天狗をさがしているのだと！やいやい、疫病神！　お前たちが毒をまき散らしたから、妹が病気になったのではないか！　お前なんか消えて無くなっちまえ！」

といって、にらみつけるのです。

べそかき天狗はくやしくてしかたがありません。だれにも見られないように、そっと涙をふいてお父さんをさがし続けました。けれども、やっぱり見つけることはできません。

しょんぼりと肩を落とし、べそかき天狗が街の角をまがろうとした時でした。大きな袋を担いだ男が近づいてくるのが見えました。

（ドロボウの親分？）

べそかき天狗は驚き、建物の陰にかくれようとしました。が、間に合いませんでした。

「やあ、べそかき天狗君じゃないか。いったいこんなところで何をしているんだい」

名前まで知っているので、べそかき天狗はますますあやしみ、逃げようと思いました。けれども、人間の中で親しく声をかけてくれたのは、この男が初めてです。そこで、勇気を出して、お父さんをさがしていたことを話しました。

「お父さんを？　そうだったのかい」

男がうなずきながらいいました。

「それではお父さんのところへ連れていってあげよう。しかし、君のお父さんは夜明け前にならないと、そこには来られないのだ。それまでどうする？　そうだ、わたしの仕事を手伝ってくれないかい」

べそかき天狗は驚き、その場で断りました。

「いやだよ。泥棒の手伝いなんか」

「なに、泥棒の手伝いだって？　ワッハッハッハー。わたしはサンタクロースじゃよ。子供たちが眠っている間に、プレゼントを届けてあげようと思っているんじゃよ。だから、先にいって、様子を見てきてほしいのじゃ」

「えっ、サンタさんだったの。ああ、よかった。だったら、お手伝いをしてもいいよ。ぼくは神通力で空を飛ぶこともできるし、カギが掛かっていても、家の中に入ることができるんだ」

べそかき天狗は胸を張っていいました。

「そうかい。それではあの角の家にいって、女の子と男の子がよく眠っているかどうか、見てきておくれ」

「わかった。あの、ポストの前の家だね」

いうよりも早く、べそかき天狗は飛んでいきました。女の子の部屋はすぐに見つかりました。可愛いクマのぬいぐるみをだいて眠っています。

「きれいな顔をして、よく眠っている。女の子って、どうしてこんなに可愛いのかなあ…。あれえ？　こんなところに薬がある。体温計も…。そうか、この子は病気だったのだ。早く治るといいのに…」

べそかき天狗は独り言をいいながら、部屋を出ようとしました。と、女の子がにっこり笑っていいました。

「お兄ちゃん、ありがとう」

べそかき天狗は驚き、あわててカーテンのかげにかくれました。が、女の子はそれきり何もいいません。

「ああ、よかった。寝言だったのだ」

べそかき天狗は胸をなでおろし、今度はぬき足しのび足で男の子の部屋に向いました。

男の子も、よく眠っていました。

「よかった。早速サンタさんに報告しよう」

つぶやきながら、べそかき天狗は改めて少年の顔を見て、

「あっ！」
と、驚きの声を出しそうになりました。
　べそかき天狗を疫病神といった、少年だったのです。その顔を見ていると、腹が立ってしかたがありません。思いっきり、意地悪をしてやりたくなってきました。
「そうだ、男の子は親戚の家にいって、家にはいなかったとサンタさんに報告をして、プレゼントをもらえないようにしてやろう」
　仕返しができると思ってべそかき天狗は喜び、部屋を出ようとしました。と、眠っていた少年がしっかりした声でいいました。
「春奈、早く元気になるんだよ。元気になって、いっしょにディズニーランドにいこう」
　夢の中で、病気の妹に優しい言葉をかけているのです。その言葉を聞いて、べそかき天狗は仕返しをしょうとしていた自分が恥ずかしくなってきました。
「あの時少年が怒ったのは、ぼくがじゃまをしたからなんだ。薬を買って、急いで帰ろうとしていたのに、ぼくが呼び止めたからなんだ。ぼくが悪かったんだ。それに、あの可愛い女の子のお兄さんだし。もう、意地悪するのはやめよう。二人とも、よく眠っていたよと、サンタさんに知らせてあげよう」
　はればれとした顔をして、べそかき天狗は報告のために帰っていきました。

## ボクのクリスマスーもし　あなたがー

**西山純子**

あなたが　驚きや　不安を　のりこえて
「御心に従います」と言っていなかったら
ボクは　クリスマスを知らなかっただろう
乙女　マリアさん

あなたが　お嫁さんになる前に
お母さんになるマリアさんを
静かに受け止めていなかったら
ボクは　クリスマスを知らなかったんだね
マリアの夫　ヨセフさん

キラキラ輝く赤星を見つけて
ひれ伏し　探してくれた　あなたたち
その　へりくだった　祈りがなかったら
ボクは　クリスマスを知らなかったよ
大勢の羊飼いさん

東方の　彼方から　不思議な星に導かれ
研究を重ね　信じ尋ねてくれなかったら
ボクは　クリスマスに出会えなかったんだ
三人の博士さん

ボクたちの　何もかにも　全部
知っていて下さり
「こうしなさい」と教えて下さる

間違っていたら
「それは　いけない」と　叱って下さる
神様の愛が

折れそうに弱く　貧しい心の
小さなボクたち　一人ひとりを　包み込み
寄り添って下さらなかったら
ボクは　クリスマスを知らなかった
お祝いできなかった
イエス・キリストのお父さま
天の神様

もし　あなたが　お生まれでなかったら
気づかないで　いけないことばかりする
罪だらけの　みなに代わって
重い　痛い　怖い　苦しい
十字架を　背負って
血を流して下さらなかったら
ボクは　こうして
クリスマスの喜びを
心いっぱいに　感謝できなかった
ありがとうございます
イエスさま

いま　ボクは　かあさんの膝の上で
小さな手を組み合わせ
大きな　光の中に　置かれています

## 初めてのクリスマス

島本耀子

受洗して最初のクリスマス・イブだった。とても寒い夜だったが、教会へ着くと、クリスマスのキャロリングに行くところだという。

事前の話は聞き洩らしていたが、早速私も参加することにした。先導した牧師の突然の発案だったかもしれない。以前いた教会は小さな教会だったからそんなこともあり得た。

近くの病院付属のホームへ行くと数人が笑顔で迎えてくれた。病院の窓からは、数人の患者さんが顔を出した。街角でも歌った。「きよしこの夜」のほか、数曲はよく覚えていない。私たちの張り上げる精一杯の歌声は、夜空に流れ吸い込まれて行った。

教会へ戻ると、牧師夫人が寒かったでしょうと、大きなカップにたっぷりの甘酒を下さった。コック帽を頭に乗せたＮさんが中心になって、愛餐会の準備も整っていた。Ｎさんは何かにつけて教会員に食事を提供してくれた。牧師夫人も、おもてなしの人だった。

二十七前のことである。Ｎさんはじめ、牧師夫人も他の人たちも多くはすでに召されている。私の初めての本当のクリスマスだった。

いずれ神のみ国で、あの懐かしい方たちに再会できる期待は大きなプレゼントである。

## 童話・いちばんはじめのクリスマス

土筆文香

クリスマスの夜です。七才のゆうとは病院のベッドでしくしく泣いていました。クリスマスまでには退院できると先生にいわれたのに、ゆうとの胸はゼーゼー鳴って、ぜんそくがちっともよくなりません。

「いつになったら治るのかな。どうしてぼくは病気ばかりしているんだろう」

生まれつき体の弱いゆうとは、これまで何度も入院しています。

「泣かないで、今日はお祝いの日なんだよ」

耳元で声がしました。カーテンがゆれて、ぬいぐるみのろばが姿を現しました。ゆうとが背中に乗れるぐらい大きなぬいぐるみです。ろばの目は青く、キラキラ光っています。

「あっ、ブルー！」

それは、去年のクリスマスに届いたサンタさんからのプレゼントでした。目が青いのでブルーと名前もつけたのに、ぜんそくがひどくなるからと、お父さんがどこかへ持っていってしまったのです。

「元気でよかった。どこにいってたの？」

ゆうとはブルーの頭をなでました。

「保育園で子ども達の遊び相手をしてるんだ」

ブルーが耳をぴくぴくさせました。

「世界でいちばん初めのクリスマスをみせてあげる。ぼくの背中に乗って」

「無理だよ。外にいくとぜんそくの発作が起きて、死ぬほど苦しくなるんだ」

「だいじょうぶ。発作は起きないよ」

ブルーが足を曲げて背中を低くしたので、ゆうとはそっとまたがりました。

ブルーの鼻からシャボン玉のような透明の風船が出てきて、ゆうととブルーをすっぽり包みました。そのとたん、ゆうとの胸の音がぴたっと止まりました。風船は、ふわっと浮かぶと窓をすりぬけて外に出ました。風船は透明なので外の景色がよくみえます。夜空には数えきれないほどの星が輝いていました。

「ゆうとくん。ベツレヘムに着いたよ」

積み木箱のような家が建ち並んでいます。町はずれの通りに、ろばに乗ったお腹の大きな女の人と、寄りそっている男の人がいました。ふたりとも困ったような顔をしています。

「あの人たち、どうしたんだろう」

「ヨセフさんとマリヤさんは泊まるところを探しているんだ。マリヤさんはもうすぐ赤ちゃんをうむんだよ。その赤ちゃんは神様の子どもなんだ」

風船は二人の目の前に降りていきましたが、二人にはみえないようです。

「困ったな。どこの宿屋もいっぱいだなんて

……。もうこの先には宿屋がない」
　ヨセフがいうと、マリヤは微笑みました。
「きっと神様が用意してくださるわ」
といったとき、お腹をかかえこみました。
「大変だ。赤ちゃんが生まれちゃう」
　ブルーがあせって首を上下に振りました。
「ブルー、だれかを呼んでこよう」
「無理だよ。風船の中にいるから、ぼくたちのことはみえないし、声も聞こえないんだよ」
　ゆうとは風船から出ようと手を伸ばします。
「だめだ！　風船の外に出たら、冷たい空気が入ってぜんそくの発作が起きちゃうよ」
　ゆうとはマリヤの苦しそうな姿をみて、胸が痛みました。同時にひどい発作で息ができなかったときの恐ろしさを思い出しました。
（あのときみたいな苦しい目にはあいたくないな。でも、神様の子どもが生まれるのに、これじゃあんまりだ）ゆうとは決心してぐいっと手を伸ばし、風船を指でつつきました。
　パーンと音がして、ゆうとは道にころがり出ました。急いで起き上がると、近くの宿屋にかけこんで大声で叫びました。
「すいません。お腹の大きい女の人が苦しんでいます。赤ちゃんが生まれるんです。泊まるところを用意してください。お願い！」
一気にいうと、ゆうとはすわりこみました。
「赤ちゃんが生まれるって！　それは大変」
　宿屋の主人は外に出てきました。
「家畜小屋でもいいなら、お泊まりなさい」
　マリヤとヨセフは何度も頭を下げて、家畜小屋に入りました。ゆうとがほっと胸をなでおろしたとき、ゼーゼーと胸が鳴り、息が止まってしまうほど苦しくなりました。
「早く、背中に乗って」
　ゆうとがやっとの思いでブルーの背中に乗ると、風船に包まれて息が楽になりました。

　しばらくして、赤ん坊の泣き声が聞こえてきました。ふたりが家畜小屋へ入ると、飼い葉おけに赤ちゃんが寝ていました。
「神様の子ども、イエス様だよ」、「イエス様、お誕生おめでとうございます」
　ゆうとが赤ちゃんに語りかけると、イエス様は目を開け、ゆうとをじっとみつめました。「ぼくのことがみえるんだね」
　ゆうとの心の中にあたたかなものが広がりました。あたたかなものは、ブルーと病室にもどった後も、ブルーと別れた後も消えません。気がつくと胸のゼーゼーの音は聞こえず、息苦しさはすっかり治っていました。

## あるクリスマス前のこと

臼井淳一

　急遽、ロンドン行きの飛行機で成田空港を飛び立ったのは、クリスマスの押し迫った一八日の日だった。東洋英和を出た娘がマーブルアーチ校のビクトリア英語教室に通っていた時だ。研修の修了間際にロンドンに来ないかと誘ってくれたのだ。
　クリスマスを前にした時期に飛行機の座席が確保出来たのは奇跡的な出来事だった。
　幸運にも機内の隣の席にいた英国人がこれから家族の許に帰るところで、機中で私の善きサマリヤ人となってくれた。「空港からホテルへはタクシーだと五〇ポンドも掛かるから地下鉄を使うんだ。」ということから始まって、地下鉄の乗換駅やサークルライン、ロンドン市街の概要などを細かに教えてくれた。
　飛行機がヒースロー空港の上空から着陸態勢に入ると雨が降っているのに気が付いた。薄暗がりの中に滑走路の所々にライトに照らされて水溜りが出来ている様子が窺えた。
　ターミナルビルを出ると、厳寒の大気が一気に私を襲った！。それまでは機内や空港施設内の暖気で気が付かなかったのだ。通称の「霧のロンドン」ではなかった。
　地下鉄で最初のホテルに向かい、その晩は独りで一夜を過ごした。

時節柄、何処のホテルも満杯で、連続して一つのホテルに滞在することは叶わなかった。数日後別のホテルに移ることになるが、それでも連続して確保できたことは矢張り神様の確かな配慮があっての事だと思った。

翌日の午前中、娘のホームステイ先であるＭＲロック宅を訪ねた。玄関を入るとアニー夫人がキャキャとした儀礼的口調で私を迎え入れてくれた。

居間にはクリスマスツリーが飾ってあり、プレゼントが所狭しと並べられ、クリスマスカードが何枚もボードに掲示してあった。娘と二人でお茶とクッキーのおもてなしを受け、彼女が借りていた三階の屋根裏部屋に上がった。身の回り品を手際よく纏め、早々に暇乞いし、ご夫妻の家を後にした。

その後、娘は在籍する英語学校に行き、皆にお別れの挨拶をし、修了証を貰って戻って来た。

やっと神様から安息と平安を賜るホテルに身を寄せることが出来る時が来た。ホテルの部屋に入るなり娘はベッドに横たわった。留学中の疲労が重なったのかすぐに深い眠りに落ちて行った。

目が覚めると「あゝよく寝たな！こんなにぐっすり眠ったのは何か月振りだろう。イギリスに来てから初めてだヨ。何時もホストファミリーに気を使ったり、最近は部屋の寒さで熟睡したことなど一度も無かった、緊張ばかりしていて。何しろ一番気が休まるのは学校なんだヨ。一番気が休まるのが学校だなんて今度初めて知ったヨ。今まで学校は嫌な所だと思ってきたが」と話してくれた。

ホテルに同宿してから三日目には新しいホテルに移ることが出来た。近くに大きなメソジスト教団の大聖堂が在ったのには驚いた。

日本を出る時「イギリスに行ったら必ず何処かの教会へ行こう」と決めていたからだ。こんなに近くに在るとは想像もしていなかった。「しめた！」と思った。すぐさま彼女に喜び勇んで「明日、一緒に教会に行って感謝の祈りを捧げよう！」と言った。主の恵みに感謝しつつ、翌日の主日礼拝に揃って出席した。

それからの数日間は、二人でロンドンの中心街にあるハロッズ高級百貨店やウエストウエッジ陶器店、ショッピング・スクエアーなどを巡り、買い物や観光を楽しんだ。彼女の好きなうどん屋にも行った。ホテルまでクラシック調のタクシーを使ったこともあった。

夜、ある書店の前で、可愛らしい子供達がローソクを片手にキャロリングしていた姿が聖らかで印象的だった。

日本のクリスマス・イブの日に成田空港に二人で還って来た！

## 蟻の喜び

篠田一志

天地万物を造られた神は、人間の建てた宮や家でゆったりとくつろがれることはないと思う。なぜなら、神と人間ではスケールが違いすぎて、神を満足させられる家など人間には建てることができないからだ。

もし、建てられると思うのであれば、まるで巨象を踏みつぶそうとしている蟻のようで愚かで滑稽なことではないか。にもかかわらず、私はしばしばそういうことをしてしまう。また、そうすることが信仰生活だと思ってしまう。我ながら始末が悪いと思う。

その最たるものが、神を喜ばせるために何をすればよいかと懸命に祈っていることだ。所詮、私たちには神を喜ばす術など無いのではないか。

たとえ、毎日聖書を読み、熱心に教会生活に励んだとしても、それは人間が神のために家を建てようとしているのと同じことで、「神様、どうぞわたしの建てた家でお休みください」と言っても、私たちにはそのような家は建てられないのだ。

私たちにできることはただ一つ、神を喜ぶことではないか。そして、神を喜ぶ最たるときがクリスマスなのだ。賛美歌を歌おう！

喜びたたえよ／主イエスは生まれぬ／

## 思い出のキャロリング

佐藤晶子

まだ、教会を知らなかった頃から、毎年クリスマスが近づくと街の中に流れるクリスマスソングを聞いては今年もあとわずかになってしまったと気が付いたものだ。

友人とレストランに入っても歌詞を思い出しながら口ずさんで楽しんだ。駅前広場でどこかの教会や学校の聖歌隊が合唱するのを聴くのはもっとうれしく、私もその中に入りたくなってしまうほどであった。神様はクリスマスソングを用いて私の心に近づいておられたと思えてならない。

キャロリングという言葉を初めて聞いたのは二十代半ばだった。私は失敗や挫折の中で、家族や周囲の人たちも迷惑をかけることがあったが、その事によって教会に行くようになった。

教会にはクリスマスの時に教会員のお宅の玄関先で、キャロルを歌うというサービスがあった。通い始めて間もない私も参加させていただいた。

順番に回って、我が家も訪問され、同じように両親の前で歌ってくれたが、最後までドキドキの連続だった。しかし、その時のキャロリングのお蔭で、母は私を喜んで教会へ行かせてくれるようになった。

時は過ぎ、東日本大震災の後、通い始めた岩手県千厩教会は傷んで使用に堪えなくなった。私たちは新しい教会堂と牧師館の建設に向かって歩みだす事になった。

会員も資金もわずかな中での新会堂建築には何が待ち受けているか想像ができなかった。しかし国内はもちろん海外からもたくさんの支援や協力があって、やっと外装だけが出来つつあった頃、クリスマスをどうするかという壁にぶつかった。

私は、昔楽しかった経験からキャロリングをやりたいと提案すると、新会堂の前でやりましょうと賛成の声が上がった。

クリスマス・イブのその日は、空はどんよりとし、時どきみぞれの舞う夕方であった。私たちは五人で寒さに震えながらも『まきびとひつじを』と『きよしこのよる』をで力いっぱい賛美した。ささやかなキャロリングだったが、心の中にはひときわ明るい火が灯った。

『恐れるな、私はこの民全体に与えられる大きな喜びを告げる。きょうダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった』（ルカ二章１０、１１節）

その夜の会場にはカレーが用意されていた。私達はもうすぐ新会堂での三回目のクリスマスを迎える。

### 編集後記

★サンタさんではないけれど、代わって、手紙を書いた子供たちにプレゼントしたくなりました。バラエティ豊かで、楽しいクリスマス号になったと自画自賛です。ハッピー・クリスマスとなりますように！（Ｙ・Ｓ）

★今回はジャンルを問わず、分量も自由にと呼びかけたら、個性全開のすてきな作品が寄せられました。募集から一か月のスピードでした。

降誕されたイエス様はロゴスの神です。人を救い、生かすロゴスの神の民にふさわしく、ＪＣＰは言葉を通して神の愛を伝えていきたいと願っています。（Ｋ・Ｍ）

### ＊ＪＣＰのホームページ＊

ＪＣＰはＷｅｂ上での活動にも力を入れています。記事は毎月更新しています。主なプログラムをご紹介します。

- 月ごとのあいさつ
- 各ブロックの集会案内
- 会員の作品紹介
- 会員の出版物の案内　など
- ＵＲＬは下記です。ぜひご覧ください。　http://jcp.daa.jp/

（Ｆ・Ｔ）